

Miss Hughes 『JAPAN AND HER PEOPLE』を訳了して

今回、上記の書物の翻訳を終えて、改めて、「松蔭は実にいい外国人教員に恵まれていたのだなあ」という思いを新たにしました。

前回に取り上げた、ミス・リーは、たまたま私の英語の恩師でもあった方ですが、どちらかと言うと理系の頭脳をお持ちであったと思うのですが、結果的に八代主教を助け、同主教の、正にグローバルな働きに貢献されました。これに反してミス・ヒューズは、どちらかと言うと、文系の頭脳の持ち主であると言えましょう。文章もうまいが、その構成も見事と言えます。本当にお上手ですねえ。

日本理解の導入に、豪華客船に乗って近代的な日本の港に近付いたとき、半裸の日本人漁師に出会った驚きを、そして黒い顔をした小柄な日本人女性のなかに、「日本人女性の美しさ」を発見するなど、その観察の鋭さ、その表現の絶妙さに圧倒されたのを覚えています(第1章)。それにしても、ヒューズさんとお会いしたかった。しかし、それは許されぬ贅沢と言わねばなりませんまい。

私は戦前から戦後にかけて、日本の激動期を経験してきました。しかし、つらつら考えるに、如何に軍国主義一遍倒の時代であったとは言え、自分は何という偏向した教育を受けてきたのかという反省、と言うより口惜しさ、何という無駄な時間を費やさされたのかという口惜しさを覚えるのです。

文章もうまいが、実によく勉強しておられるのが分かります。私も、親とか年長の方々からの話で、知識として、家父長的な日本の「家」制度・農村の次男三男の置かれた宿命・女工哀史・余りにも酷い男尊女卑の社会構造・虐げられた家庭内の女性の地位について、ある程度のことは知っていました。しかし、ヒューズさんのこの書物を読んで、それを実感しました。例えば、この書物の登場人物である渡辺夫人の姉の「カツ」さんの出戻りの話は、正直言って、涙

なしには読めませんでした。また、戦前の男子なら全員が通らねばならなかった——当然、私も覚悟していましたが——「徴兵検査の」、と言うより「徴兵検査逃れの話」など、こんなことがあっていいものかという憤りを感じました。

何も、学校教育だけが大切なわけではありません。しかし、当時の国力を考えると、小学校6年、あるいはそれにプラス2年の高等小学校での教育を加えて合計8年間の教育を支えるのがやっとと言える時代に、あの教育勅語を發布した当時の為政者、それと手を組んだ当時の道学者には許せないものを感じました。今の私が読んでも幾つもの難しい、殆どその意味の分からない漢語の美辞麗句。その中に、皇室を重んじ、国家を大切にすること「=忠君愛国」ということを組み込んだ教育勅語には、憤りをすら感じました。いや今でも感じています。今の私が教育勅語を読んでもかく理解できるのは、当時の小学校低学年の担任をしていただいた先生方の、恐らく文部省指導要領に基づく指導によって、私たちにこの教育勅語を読み聞かせ、理解させて下さった努力のお蔭だと思っていますけれども。

よく勉強されていますねえ。例えば、明治維新のあと、人々が、我も我もと、東京を目指して移って行ったことなど。それよりも、自家の東京への転宅を、親戚の者たちがどのような目で見、どのように受け止めるだろうかといったような心配(第4章)など、その肌理の細かい分析には驚くばかりです。

また、日本の学校制度に関して、その「家父長的な」日本政府の定めた制度といった表現(第5章〔原書p.69、下から2行目])など、このような見方があるのかと妙な印象を覚えたのを思い出しています。

また、第7章の日本の社会の分析に関して、迷信に関する話など、よくここまで知っておられるなあと感服しました。まさか狐憑きの話まで知っておられるとは思わなかった。「恐れ入った」と言う以外に言う言葉を知りません。迷信と言えば、祖母に付き合ってお大師さんにお詣りし、そこの水で目を洗ったことなど、今考えれば、ぞっとするようなことですが、当時の迷信、それに基づいた自分たちの生活行動をある意味で懐かしく思い出しています。

さすがに教育者であるだけに、教育に関する描写は圧巻と言えましょう。例えば、第5章の日本の教育の分析のなかに、日英両国の教育を比較し、イギリスの教育と日本の教育の大きな違いは、「イギリスではしっかりとした個性を形成し、ある程度の知識を身に付けるだけでなく、自ら進んで自主的に物事を考え研究心をもって物事を探求しようとする資質を持った人間を育成しようとするのに対して、日本では、子供たちを男女とも個性を持った一つの「人格」とは考えず、国家の一員であるという面が重要視され、天皇のため国家のために、自己を抑制し、滅私奉公に努める人物の育成をその目的としているということなのです。すなわち日本では、全国民の一致団結こそが最も重要なことであると考えられ、国家を構成する個々の人間については、殆どその価値は認められないのです」——と喝破されているのは見事と言うべきでしょう。

時代の流れとは言え、松蔭が宣教師校長を受け容れていた期間は限られていましたし、ミッション・スクールは日本の教育の本流ではありませんでした。その後、松蔭とSPGとの絆も、そして日本とイギリスとの交流も薄れていきました。せっかく築かれた両国の絆も次第に薄れていったのは、宿命であったかもしれません。ただ、彼女が伝えようとした個性尊重に基づく人間尊重の教育が片隅に追いやられ、全体主義的な世潮が主流を占めるようになったのは実に残念なことでした。

今後、我々が、そして我々の後輩が、また松蔭で学ぶ機会を与えられた人々が、松蔭の歴史から何事かを学ぶことができればこれに勝る幸せはないと思っています。

黒澤 一 晃